

2025年度神戸大学文学部公開講座「人文学と政治」

< 講義概要 >

9月20日（土）13:40～15:10 佐藤 昇 教授

ソクラテスを断罪すべし ―政治リーダーの思慮

前5世紀半ば、ペルシア戦争を経てギリシア随一の大国となった都市国家アテナイは、栄華を極めていた。各国の産品に満ちたアゴラ（中央広場）は行き交う人々で賑わい、周辺は国内外の知識人による活発な談論・講義の場ともなった。のちに西洋哲学の礎と目されることになるソクラテスも、ここで有力者、知識人と対話をくり返し、衆目を大いに集めた。

やがて前399年、齢70になったソクラテスは、メレトスなる若者により瀆神罪（神々に対する不敬罪）の廉で告発された。告発団には当時の政治指導者アニュトスも加わっていた。裁判当日、501人の裁判員（30歳以上の男性市民から抽籤で選ばれる）は、告発側、被告側双方の弁明に耳を傾けたのち、被告人有罪の判決を下し、さらに量刑をめぐる第2演説を経て、ソクラテスに死刑を宣告した。こうしてソクラテスは毒杯を仰ぎ、人生の幕を閉じることとなる。

本講義では、歴史学の立場からこの裁判に注目し、「告発者」、とりわけ政治指導者アニュトスの立場にたって、どのような歴史的状況、政治的情勢の中でこの告発を考えたのか、「瀆神罪」とはどう言ったものだったのか、なぜこの罪状でソクラテスを告発すべきだと考えるに至ったのか、考えてみることにしたい。

9月20日（土）15:20～16:50 大橋 完太郎 教授

文化戦争とサブカルチャー

「文化戦争」とは、1990年代以降のアメリカにおいて新たに定義され用いられるようになった用語で、主に伝統主義・保守主義者と進歩主義・自由主義者との対立や衝突を指します。すでに1960年代からその存在が指摘されてきたこの状況は、21世紀にかけて大きく発展したメディアやインターネット環境により、さらに顕著なものとなり、実際の政権運営や政策決定にまで影響を与えるものとなっています。「ポストトゥルース」や「フェイクニュース」、あるいは意図的に切り取られたショート動画などが、SNSを通じて拡散し、人々の政治参加に働きかける状況も、「文化戦争」のひとつの現れと考えられるでしょう。人文学も無縁ではありません。というのも、近現代の西洋哲学、あるいはそこから派生した文化や批評についての理論がこうした状況の原因であったということも、何人かの論者によって指摘されているからです。

今回の講座では、近年の「文化戦争」のいくつかの局面に注目した上で、そうした状況を生み出すに至った思想的系譜をたどり直し、人文学的思考が直面している問題を考えてみます。また、そうした思考や理論において重要な位置を占める「想像」や「解釈」という行為が、近年の映画やアニメなどのサブカルチャー的文化産物のなかで駆動し、陰謀論的な世界観の構築に寄与している可能性についても、具体的な作品に触れながら考えてみたいと思います。

9月27日(土) 13:30~15:00 平井 晶子 教授

「わたし」から始まる社会学 —「個人的なことは政治的である」再考

日常の暮らしには様々な権力構造が組み込まれている。皆さんはそれらにどれほど気づいているだろうか。たとえば職場や家庭に「機嫌が悪い」人がいるとして、それに自分がイヤな思いをさせられるのはどのような場面だろうか。機嫌の悪さを無視できる「関係」であれば聞き流せばいい。しかし、機嫌の悪さを提示できるのは往々にして権力を持つ側であり、権力を持つ側の機嫌の悪さは無視できないがゆえに、持たざる側を追い詰める。

このような「イヤ」な思いを、どのように解釈し、対応し、サバイブしているのか。「イヤ」とまでは感じなくてもモヤモヤする場面に出くわした時、私たちはどうしているのか。やけ食い？ふて寝？このような古典的な対応は今も健在かもしれない。今風に推し活で気分転換をすることもあろう。が、それが続くと参ってしまうのでは？

セクハラやモラハラは名前がついたことで「悪いのは自分ではない」と考えられるようになった。しかし、名前がついたからといってすぐに「クレーム申し立て」ができるわけではない。それに、まだまだ名前が付いていない身近な権力行使もたくさんある。

この講座では、日常の中に潜む権力構造を告発するために、フェミニズムや社会問題の社会学が磨いてきた社会学的知について考える。

9月27日(土) 15:10~16:40 原口 剛 教授

公園は誰のものか —地理学から問う <コモン> と <コモン化>

いま、「公園」は危機に直面しています。「にぎわい」などの耳ざわりのいい言葉の陰で、公園を民営化／私営化する事例は後を絶たず、その勢いは強まるばかりです。いまや公園はまるでショッピングモールのような空間へと塗り替えられ、「稼ぐ公園」という表現すらまかり通るようになりました。神戸もその例外ではありません。たとえば王子公園では、いま、公園を売り払おうとする動きが進められています。そしてその動きに対し、公園に思い入れの深い住民が、異議申し立ての声を挙げています。はたして公園は、誰のものなのでしょう。そして「公園」の条件とは何なのでしょう。私たちは今こそ、そのような問いに向き合わなければなりません。

じつはこのような状況は、日本に限られたことではありません。一九九〇年代以降の地理学では「公共空間の危機」が叫ばれ、世界各地の研究者によって批判的な議論が積み重ねられてきました。そうして現在では、「コモン」や「コモン化」(commoning)といった概念が練り上げられています。それらの対抗的な概念はきっと、公園とは何であったかを私たちに思い出させ、取り戻すための武器になるはずです。

このような問題意識のもと、本講座では、国内外の公園改造の事例を取り上げ、また、異議申し立ての声に連帯しつつ、「公園は誰のものか」を問うてみたいと思います。本講座が、キャンパスの内側と外側とを切り離す壁を取り払い、「大学」という公共空間を取り戻すきっかけとなることを願っています。